

＜研究成果の紹介＞

マルチ敷設によるチャノキイロアザミウマ防除低減の可能性

農業研究部紀南果樹研究室

1. 成果の内容

本研究では、透水性マルチシートを使った栽培を行っている時のチャノキイロアザミウマ被害軽減効果と防除回数低減の可能性について検討しました。

研究室内の宮本早生(16年生、極早生系統)を用いて、2003年7月11日に透水性マルチシートを樹間に敷設しました。樹幹両側(樹の根もと)は約1m空けて、園内の被覆率は80%とし、雨水は流入するようにしました。

対照区は、慣行防除を行い、マルチ区はアザミウマ類対象の殺虫剤防除は、行いませんでした。アザミウマ類の調査には、黄色粘着板を用い、約10日間隔で、回収設置を繰り返し、誘殺されるチャノキイロアザミウマの数を調べました。

マルチを敷設するまでは、両区ともほぼ同じ傾向で、誘殺されていましたが、マルチ敷設後は、マルチ区ではほとんど誘殺されませんでした(図1)。このことから、園地内でのアザミウマ類の密度が低くなっていたことが推察されます。そこで肝心の果実への被害軽減効果については、収穫時に果実品質とともに調査をしました。

アザミウマ類対象の防除を行わなかったにもかかわらず、被害果率、被害程度とも対照区とほぼ同等でした(図2)。このことから、マルチの敷設により、アザミウマ類の園地内密度を下げることができ、

果実への被害を軽減できると考えられます。そして、マルチ敷設期間中は、アザミウマ類のみを対象とする殺虫剤防除を、省略できると考えられます。

2. 技術の適用効果と適用範囲

夏期のマルチ栽培を行っている温州みかんで活用できます。また、チャノキイロアザミウマの発生状況の情報を関係機関(地域普及センター、病害虫防除所等)から入手することで、より確実にアザミウマ類対象防除を省くことができます。さらに、殺虫剤の散布量を低減することで、各種害虫(カイガラムシ類、ハダニ類)の天敵への影響を少なくすることができると考えられます。

3. 普及・利用上の問題点

チャノキイロアザミウマは、6月中旬頃から園内の密度が高くなり、早くから果実被害を出すことがあります。マルチ敷設前は、防除が必要です。また、カイガラムシ類、カミキリムシ多発園地では、夏期、これらの害虫を対象とした防除を行う必要があります。

(鈴木 賢)

